

氏名(国籍)	劉 玲 (中国)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博甲第3301号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	漢語オノマトペの受容に関する研究 - AA(ト)型の語の意味変化を中心に -
主査	筑波大学教授 林 史 典
副査	筑波大学教授 博士(言語学) 坪 井 美 樹
副査	筑波大学教授 博士(文学) 湯 澤 質 幸
副査	筑波大学助教授 大 倉 浩
副査	筑波大学助教授 矢 澤 真 人

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、「ボウボウ(茫々)・「ユウユウ(悠々)」といった古典中国語に由来を持ついわゆる漢語オノマトペについて、その日本語への受容過程と意味変化を、日中の多くの文献の調査に基づいて例証したものである。類義の固有オノマトペとの関連から受容を論じ、日本語オノマトペの重層的な体系を動的にとらえようとする意欲的な論文である。

本論文の構成は以下のとおりである。

序 章 問題提起／考察対象および調査資料

第1章 漢語オノマトペについての基礎的考察

第2章 「茫々(ト) - 意味の消失とボンヤリトによる関与 -

第3章 「颯々(ト)」 - 意味の限定とサト・サットによる類音牽引 -

第4章 「悠々(ト)」における意味の限定 - 抄物における「被注釈語」「注釈語としての使用及びユルユルト類による類型牽引 -

第5章 「濛々(ト)」 - 漢字表記・仮名表記と漢語らしさ・和語らしさ -

第6章 AA(ト)型における受容上の特徴及びその位置づけ

終 章 まとめと今後の課題

序章では、まず問題提起をし、次に具体的な考察対象及び用例調査資料が示され、本論文で用いる「受容」「定着」「漢語オノマトペ」「固有オノマトペ」などの用語について規定して考察の基本的枠組みが示される。

第1章では、個別的な語の考察を展開するための基礎的な考察として、先行研究に基づきながら、日本語のオノマトペを出自によって「固有オノマトペ」と「漢語オノマトペ」とに分類する観点について触れ、オノマトペの一般的概念及びその名称を確認する。次に、漢語オノマトペに関する概念規定の明確でないことや、その名称の固定していないことなど問題点について述べ、漢語オノマトペの出自となる古典中国語におけるオノマトペを4パターンにまとめる。そのうちの重言型(日本語の疊語型にあたる)について『文選』と『白氏文集』の用例を調査し、日本語の8種の資料(31文献)の用例と対照し、疊語型オノマトペであ

るAA(ト)型の使用状況を歴史的に概観している。そのうち本論文の4語を含む21語(計390例)が、各時代の多くの文献を通じて現れていることから、漢語オノマトペの中でもAA(ト)型の受容が進んでいることを指摘する。

第2章では、「茫々(ト)」における意味の消失及びその要因を検討している。まず「茫々(ト)」の意味を①～⑦の7つに分類し、そのうち、⑤～⑦の三つは日本語に新たに生じたもので、鎌倉期以降軍記物語、抄物、御伽草子、謡曲などに見られるが、⑥が限られた文献にのみ使われ、しかも特定の文脈的な要素に依存していたため、後世に受け継がれなかったこと例証する。さらに現代語に定着できたのは、⑤⑦と、中国語が元来持っていた①②の意味であること、古典中国語から受容された③④の意味が失われた要因として、固有オノマトペのボンヤリトが近世初頭以降③④の意味で定着して「茫々(ト)」を押し出した可能性のあることを主張する。すなわち、「茫々(ト)」の受容と意味変化の過程に、固有オノマトペが関与していたことを明らかにしている。

第3章の「颯々(ト)」は、前章の「茫々(ト)」とは異なり、意味の限定を生じた事例として論じられる。この語がはやく奈良・平安期の漢詩文に受容され、中世の説話集、軍記物語、抄物、御伽草子、謡曲、狂言など多様な文献に用いられるなかで、近世初期頃までに、擬音語と擬態語の広い用法を持っていたことが明らかにされる。そのうち、元来中国語には見えない、笛や鈴の擬音は近世以降消失し、中国語から受容されたと見られる風や雪の擬音も、近世に入って漢詩文に偏って使用され、ついに日常語の中に溶け込むことができなかったことを例証する。これに対して、中国文献にそれほど例を見ないすばやさを表す擬態の意味は、抄物に多用され、降って仮名草子や滑稽本などの近世文献にも使われ、現代語の中に定着している。この要因として類義の固有オノマトペ、サト・サットによる類型牽引の可能性を主張する。

第4章では、「颯々(ト)」と同じく、意味の限定を生じた「悠々(ト)」をとりあげている。その際、本論文の議論において重要な資料である抄物を扱い、「悠々(ト)」の意味変化のありかたを、抄物における「被注釈語(抄文中説明・解釈される対象であるもの)・「注釈語(抄文中原漢文の語句または原漢文に述べている内容や事柄などについて説明・解釈するために使用されるもの)」の視点から検討している。その結果、「悠々(ト)」は「被注釈語」としても「注釈語」としても使われるが、前者の場合と後者の場合とでは意味の分布の偏りが見られる。この偏りから、「悠々(ト)」の受容において、中国語として元来持っている意味のうちに日本語に定着する意味(意味③)とそうでない意味(意味①と②)とがあり、それが抄物資料では「注釈語」として使われるか「被注釈語」として使われるかに端的に現れていることを論じる。一方、日本語に定着する際に一つの意味に偏ってしまった要因の一つに、「颯々(ト)」の場合と同様に、固有オノマトペのユルユルト類による類型牽引の可能性を主張している。

第5章では、漢字表記・仮名表記の共存という問題について、「濛々(ト)」をとりあげて検討している。平安期から近世初期頃まで「濛々(ト)」は、仮名表記も若干見えるが、主として古典中国語にあった<濛々><蒙々><朦々><矇々>などのように漢字表記されることを確認する。それが字形上の濛・朦・蒙・矇の混用も絡んで、抄物では、<濛々><蒙々>が主要な表記となる一方で、仮名表記が多く使用されていることを示し、こうした両表記の共存の背景に、使用者において「濛々(ト)」が漢語か和語かという意識のユレがあったことを推定する。「濛々(ト)」は、意味・音(m音)の音象徴性及び音形パターンの面において、漢語らしさ(漢語オノマトペらしく感じる場所)と、和語らしさ(固有オノマトペらしく感じる場所)の両側面を合わせ持っていたことを用例から確認し、受容の過程での語意識のユレが表記によって表面化していると主張する。

第6章では、第2章～第5章における考察の結果に基づきながら、①意味変化の背景に日本語的な音象徴性の様々な介入があること、②定着の背景にはAA(ト)型という四拍反復型オノマトペが日本語において語形上の安定性が高かったこと、を指摘する。さらに、漢語オノマトペの固有オノマトペへの合流を、日

本語の語彙体系の中で漢語が二次的存在から一次化する過程のひとつと位置づけて、漢語オノマトベが古くから漢詩文を通して受容されてきたため、二次的存在として漢字表記から切り離せない面を持ちながら、本論文の四語のように固有オノマトベの音形パターンに合致して、一次化（固有オノマトベへの合流）が生じるケースがあることに注目している。

終章では、各章で論じられてきたことがまとめられ、個々の漢語オノマトベの受容が、日本語の語彙の体系や意味変化の問題として明確に位置づけられることを確認し、その上で残された課題と今後の展望が示される。

## 審査の結果の要旨

オノマトベについては、これまでの言語研究では、音と意味とがある程度関連する点に注意され、他の言語記号と区別されて扱われることが多かった。日本語史研究においても、音韻史では動物の鳴き声を写したオノマトベが古代日本語の子音の音価推定の徴証となることはあったが、個々の語の意味変化や変遷は、辞書における簡略な記述がもっぱらであった。本論文は、四拍反復型（A A（ト）型）のオノマトベ4語を中心とした研究ではあるが、古典中国語に由来する漢語オノマトベの受容過程と意味変化を、日中の多くの文献資料から論証した画期的な論文である。またこの例証のための調査が膨大なものであることは、論文に付された資料の量と緻密さにも表れている。この資料だけでも大変な労作となっているが、中国語話者というメリットを活かしつつも、日本漢文や抄物文献までを読みこなす筆者の能力の高さが本論文の基礎となっていることがうかがわれる。

筆者も第1章で言及しているように、先行研究でも「漢語オノマトベ」という語群を立てて固有オノマトベとの交渉を述べているものもある。しかし、由来と現代の用法を説明するだけの、いわば受容の初めと終わりのみをとらえた不十分な説明に終わっており、本論文のように受容の過程と意味変化を丹念に例証したうえで、類義の固有オノマトベとの関連をあとづけた研究はほとんどない。調査の広さと証拠の確かさは、本論文の主張の説得力となっており、その評価が高いことは、第4章のもととなった論文が国語学会の機関誌『国語学』に採用されたことから明らかである。特に、抄物という重層的で複雑な構成を持つテキストの用例の分析に見せた、注釈語／被注釈語という枠組みを使って当時の日本語での漢語の受容の程度を測る方法は、オノマトベに限らず有効な方法である。

さらに、本論文に全体に現れる文献資料の慎重な扱い方、意味変化をとらえるための意味分類の確かさ、漢字表記と仮名表記とが共存する語を「漢語らしさ」「和語らしさ」との関連でとらえようとする視点など、筆者がこれまでの日本語研究の方法を広く学び、自分のものとしていることがうかがわれ、論文の説得力をより高めている。

このように本論文はスケールの点でも論証の手堅さにおいても、水準の高いものと言えるが、なお考究されるべき課題も残っている。受容における意味変化を詳細にとらえているいっぽうで、音韻上の問題、すなわち、日本語音韻史から推定されるオノマトベの音形の変化については、音型パターンには言及するものの、長音や促音などオノマトベに特徴的な音を含めてその内実の分析が不足しており、音韻面からの漢語オノマトベの分析が課題の一つになるであろう。さらに言語間の借用という大きな視点に立っての漢語オノマトベの再検討も必要になる。しかし、このような課題についても、本論文での成果を土台としてさらに究明できる可能性をもっており、本論文の学位論文としての高い価値を減ずるものではない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。